

## 宮城の地域資源探訪

### 宮城伝統こけし

#### 「宮城の地域資源探訪の掲載」について

宮城県は全国的にも知名度の高い数々の地域資源を有しています。「宮城の地域資源探訪」では、地域資源を活かした観光振興や地域活性化に役立つ情報提供を行うことを目的として、県内の主な地域資源の由来や現況等をレポートします。

#### ●こけしの起源

こけしは、元来東北地方に固有の伝統工芸品です。こけしの起源には諸説がありますが、江戸時代の文化文政期頃（19世紀始め）、東北地方の山村に住む木地師たちが湯治客の土産物として作った木地玩具がその起源であるとする説が有力となっています。

木地師とは山中の樹を伐り、ロクロを使って椀や盆などの木地を作る工人のことですが、そのルーツは近江の国愛知郡小椋村（現滋賀県東近江市）といわれています。木地師は原木が無くなると良材を求めて移り住む生活を営んでいましたが、こうした漂泊移動を繰り返し全国に散らばることとなりました。東北地方では、蒲生氏郷が天正18（1590）年、豊臣秀吉より会津に移封された際に木地師を伴ったのが最初の移住といわれています。会津に入った木地師たちはその後原木を求めて東北の各地に移動していきました。

元々、木地師は椀や盆、柄杓（ひしゃく）などの日用雑器を作っていました。江戸時代末期になると、農作業の疲れを癒すために温泉地へ湯治に訪れた湯治客への土産物として、こけしや独楽（こま）等の玩具を作るようになりました。こけしはこうした経緯で生まれたものと考えられており、これが温泉地と木地師・こけしが深く結び付いている由縁となっています。明治の中頃になると、木地や描彩も精巧になり、こけしは次第に玩具から鑑賞や蒐集用の工芸品へとその性格を変え、現在に至っています。

#### 【コラム】

##### ～こけしと温泉～

こけし・木地師と温泉は深く結び付いていますが、県内では白石市の弥治郎こけしと鎌先温泉が極めて強い関係にあることが知られています。

弥治郎の木地師の妻達は夫が作ったこけしや木地細工を背負い、鎌先温泉の馴染みの宿に向いて商いを行っていたのです。こうした温泉商いは「鎌先商い」と呼ばれ、昭和34（1959）年頃まで続いていたといわれています。

#### ●伝統こけしと新型こけし

こけしは大別すると、伝統こけしと新型こけしに分けられます。伝統こけしは上述したこけしの起源の流れを汲んだ東北地方特産の工芸品です。伝統こけしはそれぞれ特有の形や模様をもち独特の気風を醸し出していますが、そうした形態や描彩、制作技術は師弟相伝により工人の一族あるいは弟子のみに伝承されて今日に至っています。一方、新型こけしは第二次世界大戦後に発達したものであり、制作者の自由な発想で独自の技法を用いて作られている「創作こけし」と、各地の観光地等で売られている「こけし人形」があります。

#### ●宮城伝統こけし

東北地方の伝統こけしは産地による形態や模様の違いから11の系統に分類されています。このうち宮城県には遠刈田系、弥治郎系、作並系、鳴子系の4つの本流（発祥地）に、木地師の移住により産地となった肘折系を加えた5系統の産地があり、伝統こけしの中心地となっています。そしてこれら5系統が「宮城伝統こけし」として昭和56年に国の伝統工芸品に指定されています。なお、残りの6系統は土湯系（福島県土湯温泉）、山形系（山形市）、蔵王系（山形県蔵王温泉）、木地山系（秋田県木地山）、南部系（岩手県花巻温泉）、津軽系（青森県大鰐温泉）となっており、これらの系統に含まれない伝統こけしもあります。

#### <宮城伝統こけし>



左から順に、肘折系、作並系、鳴子系、遠刈田系、弥治郎系。  
写真提供：東北経済産業局 産業部 中小企業課

宮城伝統こけしの主な特徴は以下のとおりですが、いずれの系統も他所にない魅力や美しさを持っています。

系統名称	主要産地	特 徴
遠刈田系	遠刈田温泉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目が三日月形で切れ長のもが多く、微笑みをたたえているようなやさしい表情が魅力。</li> <li>・胴は直胴で細身、頭部は差し込み(注)。</li> <li>・頭頂に赤い放射線状の飾りを描き、さらに額から頬にかけて八の字状に赤い飾りを描く。</li> <li>・胴模様は手描きの花模様で菊や梅を重ねたものが多い。</li> </ul>
弥治郎系	鎌先温泉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幅広のロクロ線による色の組合せが魅力。</li> <li>・胴はやや太い直胴か中央がややくびれた形が多く、頭部は差し込み。</li> <li>・頭頂にベレー帽のような多色の輪を描く。</li> <li>・胴模様は太いロクロ線と簡単な襟や袖の手描き模様が主体。</li> </ul>
鳴子系	鳴子温泉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・童のようなやさしい顔の表情が全体の豪華な華やかさの中に素朴さと清楚さを添えていることが魅力。首を回すと「キイキイ」と鳴るのが特徴。</li> <li>・胴は肩と裾が張り中央が窪んだ形。胴は頭部にはめ込み(注)。</li> <li>・頭頂に御所人形に似た前髪と2束の髪を描き、鬢(びん)の上部に赤い髪飾りを描く。</li> <li>・胴模様は菊を主体としたものが多い。</li> </ul>
作並系	作並温泉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昔ながらの素朴な木地玩具としての姿を残していることが魅力。</li> <li>・胴は下部が少し細い直胴で頭部は差し込み。</li> <li>・頭頂に輪形の赤い飾りを描く(黒いオカッパ頭もある)。</li> <li>・胴模様は上下のロクロ線の間独特の菊花模様を描く。</li> </ul>
肘折系	肘折温泉 仙台市	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の系統にはみられない強烈な個性を放つ顔の表情が特徴。</li> <li>・遠刈田系と鳴子系が混合して生まれた系統。</li> <li>・胴はやや太く肩が張っており、頭部は差し込み。</li> <li>・頭部は赤い放射線か黒頭。胴模様は菊や石竹などが多い。</li> </ul>

(注)「差し込み」とは、頭と胴を接続用の細い丸棒でつなぐもの。「はめ込み」とは、頭または胴に付けた先端の膨れた突起を反対側(胴または頭)に作った凹部に摩擦を利用して圧入するもの。

## ●イベント

こけしに関連した主なイベントとしては白石市で開催されている「全日本こけしコンクール」や鳴子温泉の「全国こけし祭り」が挙げられます。

全日本こけしコンクールは昭和34(1959)年、皇太子殿下(現天皇陛下)のご成婚を祝して始まったもので、以来半世紀にわたり開催されてきました。50回目の節目となった平成20(2008)年のコンクールには1千点を超える作品が出品され、全国から4万8千人のこけしファンが詰めかけました。また、全国こけし祭り(コンクール)は昭和23(1948)年に始まったもので、以降休止年をはさみながらも賑やかさを増し、東北のこけし工人が腕を競う場として定着しています。

これらはいずれも貴重な地域資源であるこけしを核としたイベントとして交流人口の拡大や知名度の向上に大きく貢献しているものと思われま。前述したようにこけしは東北固有の工芸品であり、本県はその中心地となっています。今後もこのような強みやこけしの魅力を県内外に広く発信することなどにより、伝統工芸の伝承と地域の賑わいの創出を図っていくことが期待されます。

(参考資料)

- ・日本伝統こけし協議会「伝統こけし解説」 ・みやぎ蔵王こけし館パンフレット、同館ホームページ
- ・宮城県地域振興センター「みちのく浪漫回廊調査報告書」(1998年3月)

## 【コラム】 ～こけしの語源～

①人形の頭の形が芥子(けし)の形に似ており、ここから「芥子人形」が「こけし」となった、②木で作った人形を意味する「木形子(こげし)」が「こけし」となったなど、こけしの語源には諸説があります。

このためこけしの表記も小芥子、木形子、木芥子など様々でした。そこで昭和15(1940)年に鳴子温泉で開催された全国こけし大会でひらがな表記に統一することが決議され、その後これが定着し今日に至っています。